

2020年4月16日 IofC (www.IofC.org)オンラインでのセミナーに於いて

<https://www.iofc.org/keeping-our-humanity-rajmohan-gandhi>

ラジモハン・ガンジーの論評

『危機において信頼を築く』

皆さんとご一緒に過ごすことができるとても嬉しいです。ここにおられる皆さんの多くは、妻のウシャーと私の良き友人なのですから。現在の厳しい時勢にあつて、ここにおられるお一人お一人に、そして、皆さんに近い方々にご挨拶と連帯の気持ちをお伝えします。

私たちは IofC を通じ、人間としての質、多様性を祝す IofC の生き方を共有し、民族/人種、宗教、国籍および言語等が異なる多様性に富んだ仲間ですが、私がいつも驚嘆するのは、それらの相違を祝し、違いを超えて、人間としての質、多様性を祝し、さらに種々の相違を人類として共有する素晴らしい流体に溶かしてしまうことです。

今回のコロナウイルスのため、私たちは、恐れと不安に囲まれてしまっています。が、希望の兆しが少しでも見えるとしても、長期におよぶ今後の諸問題をはじめ、次なるウイルスの到来を意識しないではられません。

もしも、穏やかな静かな時間を持ちたいと望むのであれば、心を鎮め、心の奥の声に耳を傾ける時間は、常に私たちには与えられているはずです。

この時機に古典を読んだり、ゆっくり詩を書いたり、又は、音楽や映画で時を過ごす方もいるでしょう。そして何より、誰もがお互いのこと、それぞれが皆の事、そして私たちの世界の事を考えているに違いありません。

人に触れないようにしながら、ますます愛情が高まっていくのです。

私たちは、人間として恐れや切望を、同じように求めていることをあらためて強く悟っているのです-飼い犬や猫も大事な存在であることも。確かに、以前に増して近しい人たちを大切に思うのです。

私たちのお互いに対する信頼と感謝の念は、計り知れない程強くなっています。食料品店、薬局、看護師、医師、郵便配達人、食料雑貨を届けてくれる人たち、ごみ収集車の運転手、警察官、消防官、医師、報道員を始め私たちの生活に関わっている人々等などです。数日前の事でしたが、テレビ番組で、米国ワシントン州タコマ市の食道の外科医自身がコロナ・ウィルス 19 から回復するや否や、同病に苦しむ患者さんを診るため、職場に戻ったことを知りました。第一線で働く医療関係者が経験する恐怖とそれを物ともせず乗り越える経験を素直に語ってくださいました。

私たちは、死から目を逸らしてしまっていますが、死は常に現実に身近にあるのです。このウィールスが私たちの眼鏡を拭き、目の霞を払ってくれたのです。

そして真の英雄は誰なのかを教わったのです。

先日、友人が入院先のロンドンの病院を退院しました。退院する2日前に次の考えを書きとめました。

「今日は私の誕生日ですが、別に何も考えてはいませんでした。それが、看護師のマリアとモハメッドが12時間勤務を終えて帰宅する間に、同じ病棟に入院している皆にチョコレート・ケーキを持って来てくれ、ハッピー・バースディを歌ってくれたのです。死、胆液、血液、その他多くの苦悩を伴うコロナ・ウィールス病を煩う私たちに、心をこめた彼らの行為は人の精神の尊さが示されたのです。天使の存在を疑ったなら、NHS病院勤務をしていた看護師を思ったらよいのです。患者の前では、マスクをつけているので彼女たちの顔さえ見たことがありません。」

私が尊敬するデリー市の友人、ハーシ・マンダーは、インドの新聞インディアン・エクスプレスにこう書いています。「若い友人たちは、ウィールスの伝染を止めるため政府が定めたロックダウン期間の2日目には、最もダメージが大きいと思われるホームレスの人たちに調理をした食べ物と乾燥食品を届けました。マスクと手袋を準備したものの、感染するリスクは常に身近にあり、『コロナ・ウィールスは怖い。それでも、彼らの空腹の方が、自分の恐れよりはるかに大きい』と同僚の一人が言いました。

デリー市のニザムディン地域で、マンダーはホームレスの人に「どうやって生きているのか、大丈夫かい？」と聞くと、その男は「切り詰めたお金で何とか飯を食べている」と答え、それが自分の家族ばかりではなく、近くの舗道で寝ている彼の親戚でもない3家族にも分けて、「その子どもたちがお腹をすかして寝る姿を見ていられないのです」と言っ

て。ですから、病院へ行けないばかりか、空腹を満たす食料さえも得ることができていない多くの人々のことも忘れてはならないでしょう。また、私たちの安全を考えてのロックダウンが、突然、多くの移民が通りに放り出されたり、電車やバスの乗り場に駆け込む人々のことも私たちは心に留めておきましょう。

このウィールスは、私たちの物の見方、言ってみれば万華鏡を変えてしまいました。私たちは国家対国家、人種対人種、またあるグループ対他のグループとしてではなく、私たち誰もが一緒に、人間としてウィールス、病、怪我、破壊こそ敵であるという見方をしなければなりません。

果たしてこの新しい物の見方は長続きするのでしょうか？

それとも、これまでのように自分とは違う他に反して、私の仲間、我的人種、私の宗教界、私の国への情熱の復活を見ることになるのでしょうか？

今こそ、正直にそれらの問題を問うべき時です。大胆な問いかけ。それを問う動機があり、その時を与えられているからです。

果たして世界的なパンデミックは、私たちの共通した平等感と人間らしさの認識に近づけているのでしょうか。それとも、人々の間の、国家の間のくさびを広げてしまうのでしょうか

スケープゴート(生贄)を見つけようとする衝動は、人類の共同体という考え方を変えてしまう更なる言い訳にしてしまうのでしょうか？

とるに足らないと軽蔑されているグループから、他人の命を救う為に自分の命を惜しまない人々を、どの国においても見てきているのではないのでしょうか？

私たちは、おそらく今までよりは遥かに、手を差し伸べている事は確かです！私たちには手を差し伸べる時間があり、その手段があります。

記憶しておくべき出会い、深い思考、経験等は現在、過去を問わず記録していて欲しいと思います。起きていることを詩に纏めるもよし、歌、あるいは物語として書いておくことも良いでしょう。

最後に、昔の成句(諺)に「悪はその日に限る」というのがありました。この「悪」とは、重圧であったり、負担という意味でもありますが、特にここでは、不安を意味するのかもしれませんが。今日の不安は今日限り。私たちは1日、1時間ずつ生きるのですから。

明日の事は明日に任せなさい。

今日の事に関して言えば、毎日、その日のための恵みを与えられています。どんなに小さくとも。

また、祖父ガンジーが良く自らに言い聞かせていたことは、

「遠くを見る事をしない、一歩ずつ進めばそれで十分だ」ということでした。

人生が確認してくれたことは、何があっても次の一歩が必ずある、ということではないでしょうか？

最後に繰り返すことになりますが、皆さんがおられる事、皆さんがなさること全てに、あらためて神に感謝いたします。